

持つて居る。で、先づ最初に此の音を出す。すると、現在の自分が、どれだけの力を持つて居るかがはつきりと其の音聲の上に現はれる。續けて又出す。連續して出して居ると、次第次第に強くなり、更に正しく美しく、威嚴を加へて來る。發して發して止まざれば、やがて、肉體と精神とが完全に統一して、凝止結晶、金剛不壞の神身を築き成すに到る。

第二の「エ」は、イとは反對に上下の齒を離して、舌を下げ氣味にせねば發し得ず、横に開いて廣がるのである。が、その廣さには限度が有る。横に並行の二線を引き、中央を縦の一線で劃つたのは、此の意味で、區劃を示し、分限を教へて居る。此の縦の一線を畔と呼びて、斯く在るべきものを斯くあらしむる軌範を教へられたのである。エは、アの作用を合人んむ意味を持つ。

畔は吾なので、存りて在るもので、結び止めたる靈であるから魂と呼ぶ。その結び止むるものを「ア」と稱して、玉の緒の別名である。それで、畔放と云つて祓言に擧げた天津罪は、汚濁なる生活に慣れて居る人間世界では、それ程に思はぬでも、實は甚しき反逆で、神命冒瀆の大罪だからとて、其の第一に數へたのである。

畔として、吾としての軌範に制せられたる二は、天御柱・國御柱で、各自各自の位置分限を堅持して、相互に干犯冒瀆するが如きこと無きものである。従つて此の音には制御の力が強い。繰り返し繰り返して此の發聲を續けると、自己を引き締め他を警むる威嚴を増して來る。

そこで、正しく升る音のイを強く長く引いて、制御の音のエと連ねて切ると、イーエツと成る。小さなッは、上の音を切る符號であると共に祓詞であるから、エの音義を更に強むるのである。さうして、之を繰返し繰返す。非常に強い善美正義の音であるから、自己を警醒し他を制御して正誠ならしめねば止まぬのである。従つて

イーエツ エーイー  
雄健 雄謹の神言であり、修理固成の神言 雲をよみ、  
アマノスホコノ神言 雲をよみ、

幸180頁ほかより。

㊦の段階 <sup>ヒ</sup>根本資料、<sup>ヒ</sup>零、<sup>ヒ</sup>霊とも書く。  
<sup>ナホヒ</sup>  
 (直霊)<sup>①</sup>「極」(人の身には知り得ざる究極)

㊧の段階 → <sup>ヒ</sup>結び止めたる<sup>ヒ</sup>霊、<sup>ヒ</sup>魂 (幸180)  
<sup>ナホヒ</sup>  
 直霊<sup>②</sup>という用語はここまで含めて言う。  
 この結び止めているものが「ア」  
 結ばれざる(単独の)「ア」

㊨の段階 <sup>ナホヒ</sup>直日<sup>③</sup>など。(当然ながら、「ア」を  
<sup>ヒ</sup>構成素材とする)  
<sup>ヒ</sup>魂<sup>④</sup>という用語はここまで含めて言う。  
 ↑ 結び結びたる「ア」  
 ミヅガキ。  
 ↓ 出入往返するものを指して、  
<sup>ウミヒ</sup>  
 奇霊<sup>⑤</sup>と言う。

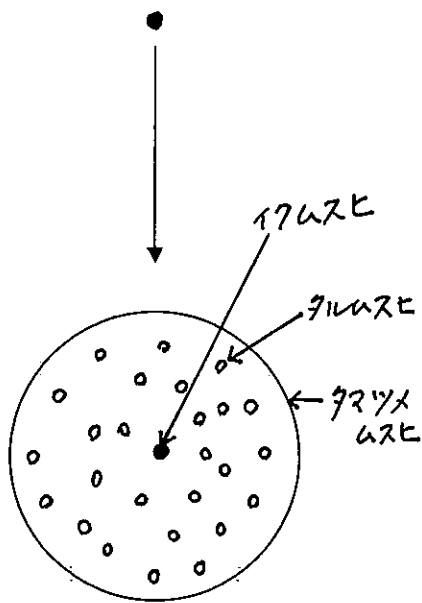
	イムスヒ 生産靈 (中心)		
ヒ の 段 階	+		
	↓		
	タマツメムスヒ 玉積産靈 (全体)		
ヒ の 段 階	このタマツメムスヒが⇒	中心となれば、 生魂 イムスヒ +	
		外郭となれば、 足魂 ヲルムスヒ	
		↓	
タ マ の 段 階		全体を総して 玉積魂 タマツメムスヒ このタマツメムスヒが⇒	中心となれば、 生玉 イクタマ +
			外郭となれば、 足玉 ヲルタマ
			↓
箇 体			全体を総して 玉留玉 タマトルタマ

## 九魂の意味内容

無宇宙に充滿する「零」そのもの。「内部構造」はない。

一切合切の種子となるべき「種子の種子」

ミムスヒ 三産靈 (これが多数累積してミムスビとなる)



その際「中心」となれば、イクムスヒ

「外郭」となれば タルムスヒと呼ばれる。

しかし、その「役割」は固定されておらず、

イクムスヒとタルムスヒの間に本質的な違いはない。

( 中心                  外郭                  全体 )  
イクムスヒ+タルムスヒ=タマツメムスヒ  
であるものと、ここでは考える。

ミムスビ 三産魂

ミムスヒと違い、一定の「内部構造」を持つ。

即ち「結び結びたる身」である。

これが人天万類一切合切の「種子」となる。

以上は、カミヨ 神界の話だが、こうして出来たイクムスビ・タルムスビ・

タマツメムスビがさらに多数累積してミツガキ 瑞垣を超え、時間・空間という枠組みの中で活動し始めると (即ち「芽を出す」と)、それはイクタマ・タルタマ・タマトマルタマと呼ばれる。

人天万類一切合切は、これによって生じる。

	7領域	(未来250頁より) 「一貫したるカミ」	古事記の神名
無宇宙の3段階	① ヒの段階	(零の神としては) 隱身天之御中主神 (タカミムス⑤ノカミ カミムス⑤ノカミ)	(左記.造化參神)
	② ヒの段階	イザナギノオホミカミの オホミマノハラへにより、 カクリミから ウツシオミに変化。	ウマシアシカ⑤ヒコダノカミ 他.三神
	③ タマの段階	(零の神としての) 三貴子	十柱神 (イザナギ・イザナミ.他) 三貴子 (←オホミマノハラへ) 五男神三女神 (←ウケヒ)
宇宙の4階層	① 第一階層	(魂の神としては) 天照太御神 (ツキヨミノミコト タケハヤスサノヲノミコト)	イザナギノミコト・イザナミノミコト 国生み・神生みによる 十四島・三十五神
	② 第二階層	(身の神としては) 皇御孫之命 (イハナガヒメ コノハナサクヤヒメ)	(個々の土地における 具体的な鎮守神・産土神) 他.アメノワカヒコ.など。
	③ 第三階層	(人類世界の神としては) オホヤマトスメラギミ (アシハラシコヲ ヤヘコトシロヌシ)	(オホクニヌシノカミや サダビコノカミは.一旦、 こゝまで降りて来ている。)
	④ 第四階層	(人間身としての天皇)	

ミヅガキ  
瑞垣

<p>多田流の用語と 古事記神話の解釈</p>	<p>神の類別</p>	<p>月神事 幸19頁 他.より.</p>	<p>備考</p>
<p>・コトアマツカミの領域 ヒノカミ カミヤ バウガウエン ・火神の神宮 (莫囿圓)</p>	<p>ヒ カミ 零の神</p>	<p>ヒ (零)</p>	<p>ヒ 零</p>
<p>・境地としての天照皇太御神 アマテラススメオホミカミ</p>	<p>(カウリミ コトアマツカミ</p>	<p>ミムスヒ 三産靈 ミタマ 御靈</p>	<p>↓ ・結ばざる タマノヲ</p>
<p>----- アマノイハヤト ----- ・オホミマノハラへの神話 ・ウケヒの神話</p>	<p>(ウツシオミ アマツカミ ミツガキ 瑞垣</p>	<p>第一魂 根本魂 直日 ニギミタマ (知魂)</p>	<p>↓ ・結び結びたる タマノヲ</p>
<p>----- アマノウキハシ ----- ・勝さびの神話 ・五穀の起源の神話</p>	<p>タマ カミ 魂の神 タマガキ 玉垣</p>	<p>第二魂 靈 ウシミタマ (奇身魂)</p>	<p>↓ これらがそのまま 宇宙の素材領域 (ヨモツクニ)に 入ると、各々、</p>
<p>----- スガノミヤ ----- ・ヲロチ退治の神話 ・因譲りの神話</p>	<p>ミ カミ 身の神 ナカガキ 中垣</p>	<p>第三魂 念 サキミタマ (幸身魂)</p>	<p>・空零 ・鬼神 ・魂魄 などと呼ばれる。</p>
<p>(出雲神話の前半部)</p>	<p>ミタマ カミ 身魂の神 アラガキ 荒垣</p>	<p>思考 マミタマ (真身魂)</p>	<p>即ち、総じて マガツビの類 である。</p>
<p>-----</p>	<p>ヒ カミ 人の神</p>	<p>身体 アラミタマ (荒身魂)</p>	

人間身として、**無宇宙**を理解するための順序  
(時系列ではない!)

① 境地としての高天原 ○

(天照皇大御神)

↓  
②  
↓

ウ  
ケ  
ヒ

← ゲナミノカミの神業 (天照皇大御神)

作用力

③ 実体としての高天原の御田 ○

(天照大御神)

イムスヒ + タルムスヒ → タマツメムスヒ 産霊ムスヒ  
 イムスヒ" + タルムスヒ" → タマツメムスヒ" 産魂ムスヒ"  
 イウマ + タルマ → タマトマルマ  
 (種子)カ

「カ魂の総一」の「カ」も実数と言うより、数理

「ヒ、フ、ミ、ヨ、イ、ム、ナ、ヤ、コ」で「トラ」となるの意味

○<sup>ヒ</sup>ヒ は 零としてのー だが、

○<sup>ト</sup>ヒ は 十としてのー (→御田) +



ミタマ			
↑ ⑤	↑		七ノカミ
ミタマ御霊 ⑥	ゴトアマツカミ		ミヅ と零の作用
↓ ↑ ミタマ御魂 ⑦ (直日)	↑ アマツカミ		別れフ 解けフ 合ふフ 結ぶフ
↑ ミタマ身魂	↑ クニツカミ	タカカミ 「魂の神」 5音1語	往きフ 返りフ
		「身の神」 4音1語	ミヅとして循環 (幸. 205)
		「ミタマカミ 身魂の神」 3音1語	



「敬神」であることは、次ぎの「祓言」に依つて知ることが出来る。

「祓言」  
ハラヘコトバ

マキリツドヘルヒトビト クニツチヤマカハ 参集 閑留 人人。 国土山河。 草木。 空行雲毛。 地潜虫毛。 天地乃在乃尽。 今日乃祓乃御祭爾。 各自各自我。  
アヤマチオカシケム クサグサノトガトイフトガ 過 犯 計 牟。 雑 雜 乃 尤 云 尤。 罪 云 罪 乃。 垢 斗 穢 斗 乎。 祓 却 閑 清 給 布。 神 乃 御 惠。 神 言 靈 乎。 敬 美 畏 美 拜 美 坐 勢  
ト マラス。 斗 白 須。 *自分の意識が宇宙の側にある状態から始まる。*

伊宇袁衣耶。  
イウヱイヤ

宇斗乃宮。 宮斯呂築成住我乎。 神乃我叙斗。 神知須邇邇。 神乃神輪叙 晃耀赫灼矣。  
テルニ テリタル

阿知米。

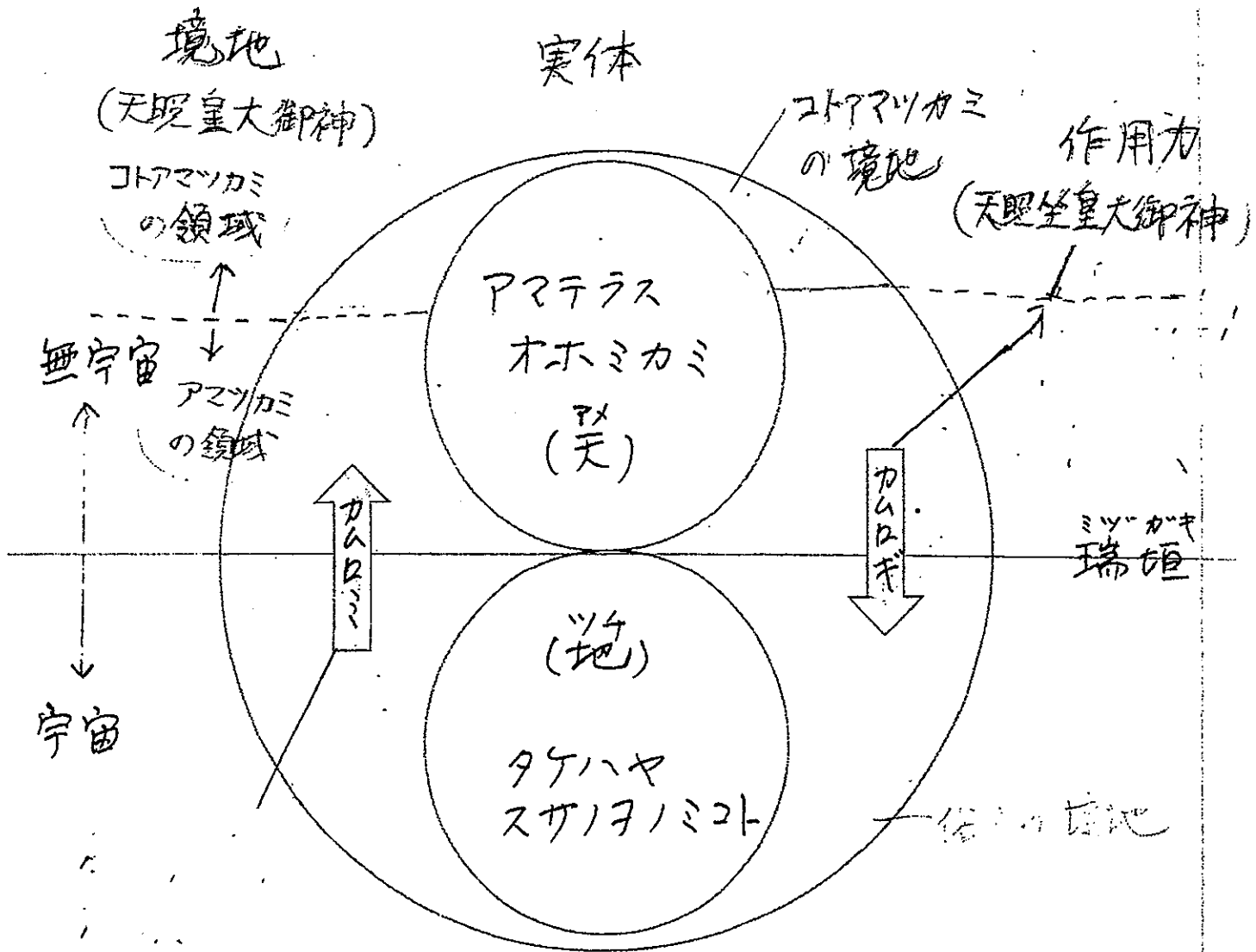
阿知米。 *自分の意識が無宇宙の側にあるものとして始まる。*

阿宇袁衣耶。 宇。 宇。 宇。 宇。 斗。 宇斗。 宇。

カク ウシナヒテバ 如此 久 失 氏 婆。 人 天 万 類 尽 天 尽 地。 今日以降。 罪 止 云 布 罪 波 不 在 止。 祓 却 給 事 乃 尊 乎。 恐 美 惶 美 且。 奉  
ミマツリ キヤマヒマツリ 拜。 奉 感 謝。 奉 祭 止 奉 白 留。 天 照 大 御 神。 神 漏 岐 命。 神 漏 美 命。 建 速 須 佐 之 男 命 止。 大 御 名 波 奉 称 且。 天

祖 天 讓 日 天 狭 霧 国 禪 日 国 狭 霧 尊。 畏。」  
ミオヤアメニツルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト カシコシ

# 祓いの神名の概念図



全部アマツカミ (ウツシオミ) のヒノカミ

祓いの段階では、視点が宇宙の側にあるため、

意識としても、<sup>アメ</sup>天と<sup>ツチ</sup>地の二項対立が成立する。

(無宇宙の側から見れば、<sup>ツチ</sup>地もまた<sup>アメ</sup>天の一部でしかなく、そもそも二項対立の図式は成立しない。)

2020.2.18.(火)

NO.

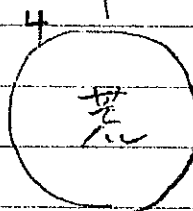
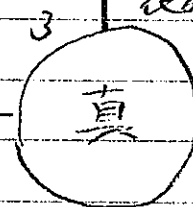
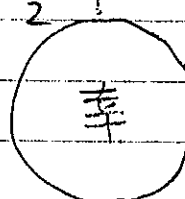
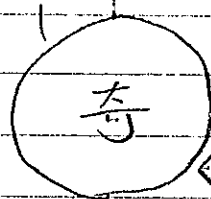
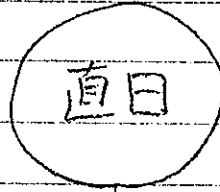
DATE

ヨモツクニ  
素材領域

ナカツクニ  
箇体領域

ヨモツクニ  
素材領域

無 (極大極小の火)



瑞垣

同下

普通は省略してこの  
表記するが実際には、  
A→Bの2段階

より粗雑な部分は  
そのまま火に焼かれ  
ハラへの対象となる。

より精妙な部分は  
鉤ひ直されて、  
上のミツマへ。

(尽天尽地の火)

故ニ。科学者ハ。之レヲ仮定トナシ。學問ノ方便トナス。然レドモ。位置ノミ存ルモ、有ルコトハ有ルナレバ。無キニハアラザルナリ。故ニ。之レヲ一ナリトナシ。又。零ナリト呼ビ。零ナル一。一ナル零ナリトナス。サレド。零即一。一即零トハ云ヒ難キナリ。

此ノ「点」ナルモノハ。箇体タル経緯ノ存在ヲ分割シ尽シタル「極」ナレバ。無ニ似タル有トモ呼ブベク。零ニ等シキ一トモ称スベク。經無ク緯無クシテ位置ノミ有リトモ云フベク。始無ク終無クシテ生滅起伏ストモ云フベクシテ。皆共ニ便宜ノ説明ニ過ギザルナリ。月ヲ教フルノ指ト。古人ノ嘆ジタル指ナルノミ。日本民族ハ。古来。之レヲ言靈トシテ「ひ」ト教ヘ来レル神ナルナリ。之レヲ $\square$ 示シテ $\bigcirc$ トナシ。又 $\bigcirc$ トナシ。更ニ、 $\bigcirc$ トナス。共ニ「ひ」ナレドモ。 $\bigcirc$ トシテハ零ニシテ一。 $\bigcirc$ トシテハ二ニシテ一ニシテ零。 $\bigcirc$ トシテハ三ニシテ二ニシテ一ニシテ零ナリ。之レヲ「ひ」「ふ」「み」ト教ヘテ。「極」ノ内容ヲ示シタルナリ。分割シ尽シタル小トシテノ極ナルト共ニ。総合シ統率シ得タル箇体トシテノ極ナルト共ニ。拡大シ發展シ尽シタル極ニシテ。又累積シ尽シタルノ極ニシテ。大ノ極ニシテ。小ノ極ニシテ。高ノ極ニシテ。低ノ極ニシテ。陰ノ極ニシテ。陽ノ極ニシテ。深ノ極ニシテ。幽ノ極ニシテ。顯ノ極ニシテ。遠ノ極ニシテ。広ノ極ニシテ。堅ノ極ニシテ。軟ノ極ニシテ。動ノ極ニシテ。静ノ極ニシテ。総ベテノ物ノ極ニシテ。総ベテノ事ノ極ニシテ。唯一点ナリ。極トシ云ヘバ唯一ナルコト勿論ナレバ。大ニモアラズ。小ニモアラズ。総合統一ニモアラズ。分裂割拠ニモアラズ。高低。深淺。遠近。幽顯。堅軟。動靜。等ニモアラズ。陰陽。男女。雌雄。乾坤。天地。等ニモアラズシテ。純一不可分ノ「ひ」ナルト共ニ重重無尽ノ「ひ」ニシテ。古老ハ之レヲ大虚空トモ呼ビ。大宇宙トモナシ。大宇宙ノ大中心トモ称シ。御中主トモ讚ヘ。母トモ呼ビ。父トモナシ。父母トモ称シ。「め」トモ

称シテ。陰ナルト共ニ陽ナル<sup>フタツノヒ</sup>ニシテ。日ノ字源ト教ヘ来リシ<sup>フタツノヒカリ</sup>二一日ニシテ。二一光ニシテ。両儀ト呼ベル太極ニシテ。胎ナル仏盤ニシテ。太平等海ニシテ。白玉光底ニ泉声潺湲タル天真井ノ水<sup>ミモヒ</sup>ニシテ。火<sup>ヒ</sup>ニシテ。水<sup>ミ</sup>ニシテ。両柱御祖神ト讚ヘテ。祖ナルナリ。

此ノ祖<sup>オヤ</sup>ノ内容ヲ教ヘテハ。天<sup>アマノミオヤ</sup>祖ト称ヘ。天讓日天狭霧国禪<sup>アメユツルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト</sup>日国狭霧尊ト拝ミ来レルナリ。

人天万類ハ此コニ発現シ。此コニ帰入ス。発現シテハ有ト呼ビ帰入シテハ無ト名ヅケテ。零ニテモアリ。一ニテモアルナリ。而シテ。此ノ「ひ。ふ。み」トハ日本天皇御神儀ニ「生産靈。足産靈。玉積産靈」ト称フル「少<sup>スク</sup>名日」ニシテ。日本民族が「稜威」ト仰ギ来レル神威<sup>カミ</sup>ニシテ。其ノ稜<sup>カミノミイツ</sup>威<sup>ムスビムスビ</sup>ノ産靈産魂タル魂<sup>ク</sup>此ノ稜<sup>カミノミイツ</sup>威<sup>ムスビムスビ</sup>ガ稜威<sup>ナヒ</sup>ノママニ結ビタル時ソレヲ生魂<sup>イクムスビ</sup>。足魂<sup>タルムスビ</sup>。玉積魂<sup>タマツツムムスビ</sup>ト称ヘ。コレヲ仰ギテハ高魂<sup>タカミムスビ</sup>ト称ヘ。之レニ抱カレテハ神魂<sup>カミムスビ</sup>ト親シミ。共ニ讚メ称ヘテ「御祖命」ナリト教ヘラレタルナリ。(先師ハ此ノ間ニ。たかみむすひ。かむみむすひ)ノ御名ヲ挙ゲラレタリ。然ル時ハ。生魂<sup>イクムスビ</sup>ガ「たかみむすひ」ナルベク。足魂<sup>タルムスビ</sup>ガ「かむみむすひ」ナルベシ。然レドモ。先師ハ単ニ其ノ位置ヲ指シテ。経ナルハ「たかむすひ」。緯ナルハ「かむみむすひ」ナリト云ヘリ。其ノ「たかみむすひ」ナリ「かむみむすひ」ナリトシテノ稜威ガ他ノ稜威ヲ集メテ一ツノ神界ヲ築キタル時。之レヲ生魂ト称ヘ。其ノ集メラレタ稜威ヲ足魂ト称ヘ。統一躰トシテノ生魂ヲ玉積魂ト称ヘマツリテ。三不可分ノ産魂ナリ。

其ノ生魂<sup>イクムスビ</sup>トハ。数トシテノ七ニシテ。実<sup>ジツ</sup>ト呼ビ。空<sup>クラ</sup>ト名ヅクル「六ノ零」ヲ外郭トシタル「一」ナルナリ。足魂<sup>タルムスビ</sup>トハ其ノ「零ナル六」トシテ。生魂ノ外郭ヲ築キタル空ニシテ坤ニシテ地ニシテ一ト画クナレバ。二ニ

シテ陰ニシテ凹ニシテ孔ニシテ。成り成リテ成り合ハザル「陰の初」ト呼ブトコロナリ。之レニ対シテ。成り余レル「陽の初」ト云ヘルハ。生魂ナルコト勿論ナレドモ。

生魂ガ凸ニシテ。足魂ガ凹ニシテ。生魂タル凸ト。足魂タル凹トノ合体タル $\square$ ガ玉積魂ナリト云フニハアラザルナリ。其ノ玉積魂ト云ヘルハ。凹ニアラズ凸ニアラズ凹凸ニアラズシテ。凹凸ヲ現ハス本躰ヲ指シタルモノニシテ「一なる点」ナリ。空ナル実ナリ。零ナル極ガ極ノママニ集積シタル統一躰ナリトノ義ナリ。故ニ。之レヲ統一魂神ト称ヘテ。内外自他ヲ統一シタル主神ナリ。「 $\cdot$ — $\circ$ 」ト描キテハ其ノ成立ノ順序ヲ教ヘ「 $\circ$  $\circ$  $\ominus$ 」ト画キテハ君臣民人ノ別ヲ知ラシメタルナリ。

今彼ノ六ハ「 $\circ$ 」ト描キテ。外郭ヲ教ヘ。境地ヲ知ラシメ。宮殿ヲ築成シタルナレドモ。イマダ住者ヲ知ラズ鎮坐神ヲ拝シ得ザルナリ。

家屋宮殿ハ築キタレドモ鎮リイマス神モ無ク住ム人モ無キハ空界零界ナリ。之レヲ「む」ト呼ブ。極ニアラザルノ零ナリ。

極ニアラザルノ零ハ。之レヲ空零ト呼ビテ幽鬼妖魔ノ祖先ナリ。

此ノ幽鬼妖魔ヲ繋ギ止メタル数ハ「七」ニシテ。空ナル六ニ一点ヲ点ジタルナリ。

此ノ一点ヲ宮殿ノ主神トナシ屋内ノ主人トナス。宮殿ハ神ニアラズ。家屋ハ人ニアラズ。然レドモ。宮殿ヲ仰ギテ鎮坐神ヲ拝シ。家門ヲ敲イテ来意ヲ語ル。

六ハ空屋ニシテ七ハ主アルノ家ナリ。

アナカシコ。



此ノ七ヲ主魂トシテ築キ成シタル<sup>ヤソロツタマ</sup>八十萬魂ヲ足<sup>タルムスビ</sup>魂ト称シテ「九」ナル窮数トナス。此ノ時。生<sup>イクムスビ</sup>魂タル主魂ハ七ニシテ一ニシテ。一トシテハ零ナル六ヲ外郭トシ。九ナル窮数ヲ統率シテ。十ナル満数ヲ完成セントシ。主<sup>ヌシ</sup>魂トシテハ。八十萬魂ノ足<sup>ヤソロソミタマ</sup>魂ヲ統治統率シテ。神界樂土ヲ築成セントス。

以上

次に、新邦築成の神命を筆録して、此の篇を結ぼう。

### 宣言

旧邦既に廢れて、新邦未成らず。

情ら惟るに

渾球一円、人類の国を建つるもの幾千万億なるべきか。年曆また茫茫として太古に在り。国運の隆替、政躰の変遷、また甚頻なり。然りと雖、治者上に在りて、民人之れを仰ぐものは一なり。

是れ、人為に依るにあらずして、宇宙真理の顯現なるが為に然るなり。

抑、宇宙とは、經と緯との存在なり。經有るが故に緯有り。緯有るが故に經有り、之れを描いて⊕となす。之れは是れ、神の子乃ち神なる統一躰なりとの義なり。統一躰なりとは、中心と外郭との不二一なる事實を明に現し得た。「物」なりとの意なり。

夫れ、物は皆中心有り。中心有るが故に外郭有り。物は皆外郭有り。外郭有るが故に中心有り。中心と外郭とは不二にして不一にして別つべからず、離ること能はざるなり。是れを、

## 第七 變 易 無 常

ミソギの行事に、「イブキ」と白すのは、天照大御神の天安河の神傳である。

其のイブキに、氣吹の字を充てて居るのは、「イ」の妙用であるとの義理から來たのである。イとは、氣息の義で、廣い意味での呼吸である。廣い意味でと云ふのは、私どもの肉體的に、口や鼻や毛孔などの呼吸と云ふのでなく、萬類萬物が、大宇大宙として、出入往返することを指すのである。都べてのものが、相互に有形と化り、無形と變りつつ、相互の世界を造りつつ、まに破りつつ、變轉窮り無き活動の筋道を主る神音で、神名である。と白しますのは、大宇宙神の御活動を、日本民族は「イ」と稱へまつるのだとの義である。

日本民族の詞としては、神の稜威を仰ぎて發する音が、イなのである。

ミイツとは、本來、神としての◎を種子とし、<sup>ミツ</sup>を體とし、其のミツの威嚴妙用を仰いて、畏みまつるが故に、イの一音を加へて・イの音が加はつて、ミイツと稱へまつらるのである。故に、ミヅは、ミイツのイが省かれたのではなく、ミヅにイの加はつたのがミイツなのである。

それで、此の「イ」は、大宇宙の呼吸だと云つたならば、稍眞を傳へ得るであらうか。大宇宙の呼吸であるから、小宇宙としての萬類萬物の呼吸も、其の内に運行する。小宇宙たる私どもの

## 録 96 頁

「境地 (天照皇大御神)

「実体 — 全宇宙神 (全体神. 木三カミ)

「作用 — への御活動. 即「イ」. (天照皇大御神)

三神即一身 実体と見れば、天照大御神。

その (天照大御神の) 作用が 天照皇大御神。

これ (天照皇大御神) を表わすコトマが「イ」。

境地 (天照皇大御神) を「ヒ」とするは、

その (「ヒ」の) 作用は、ヒカリ・伴・ミヅ・イ/4・72/7. など

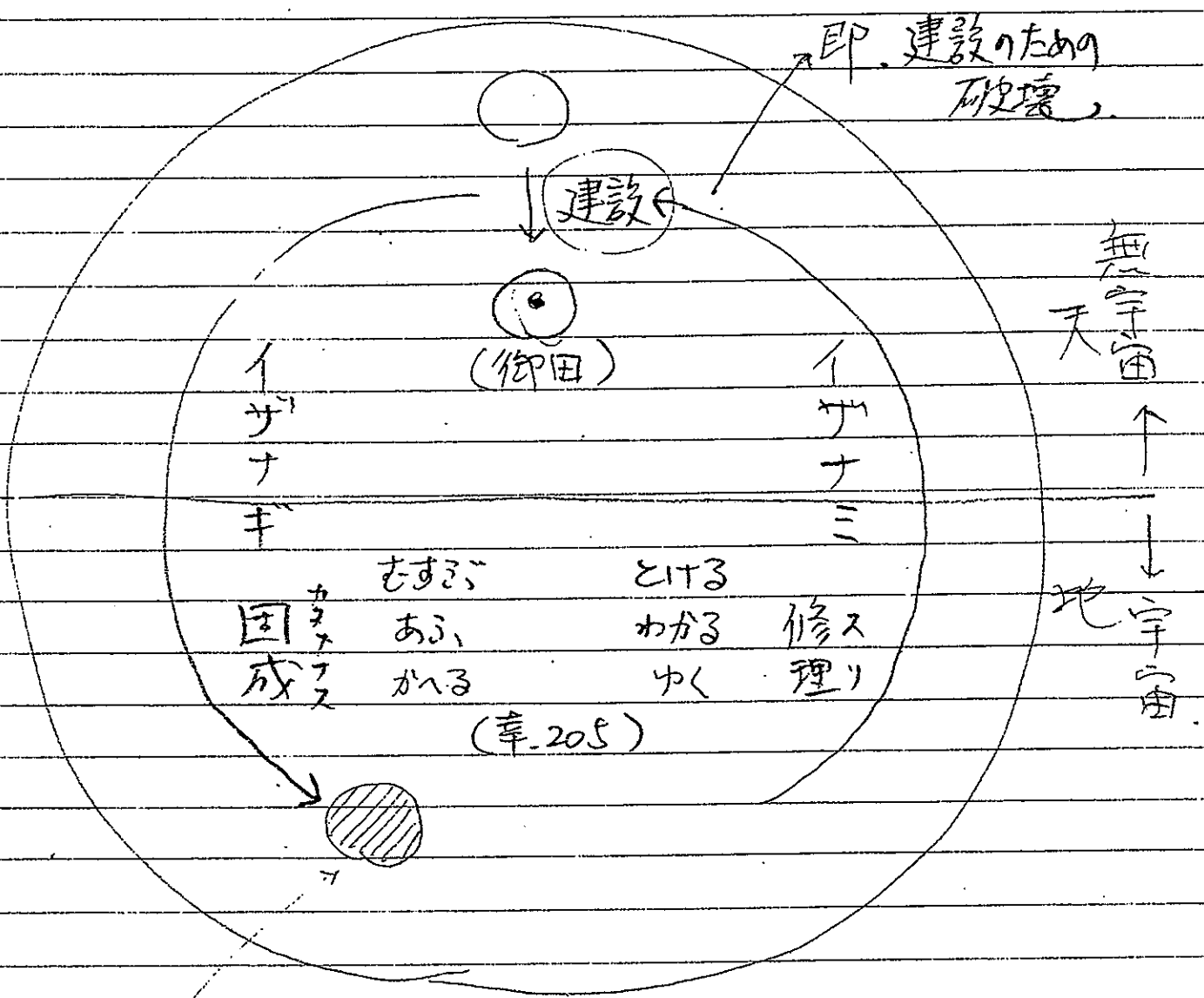
① これらもまた、天照皇大御神 を表すコトマと考えて良い。

三神即一身 決して「三柱の神が<sup>いほ</sup>坐す」という意味ではなく、

「ただ一柱の大御神に、<sup>木三カミ</sup>境地として見る見方、<sup>1</sup>実体として見る

見方、<sup>2</sup>作用力として見る見方 の三とおりの「(人間身としての)

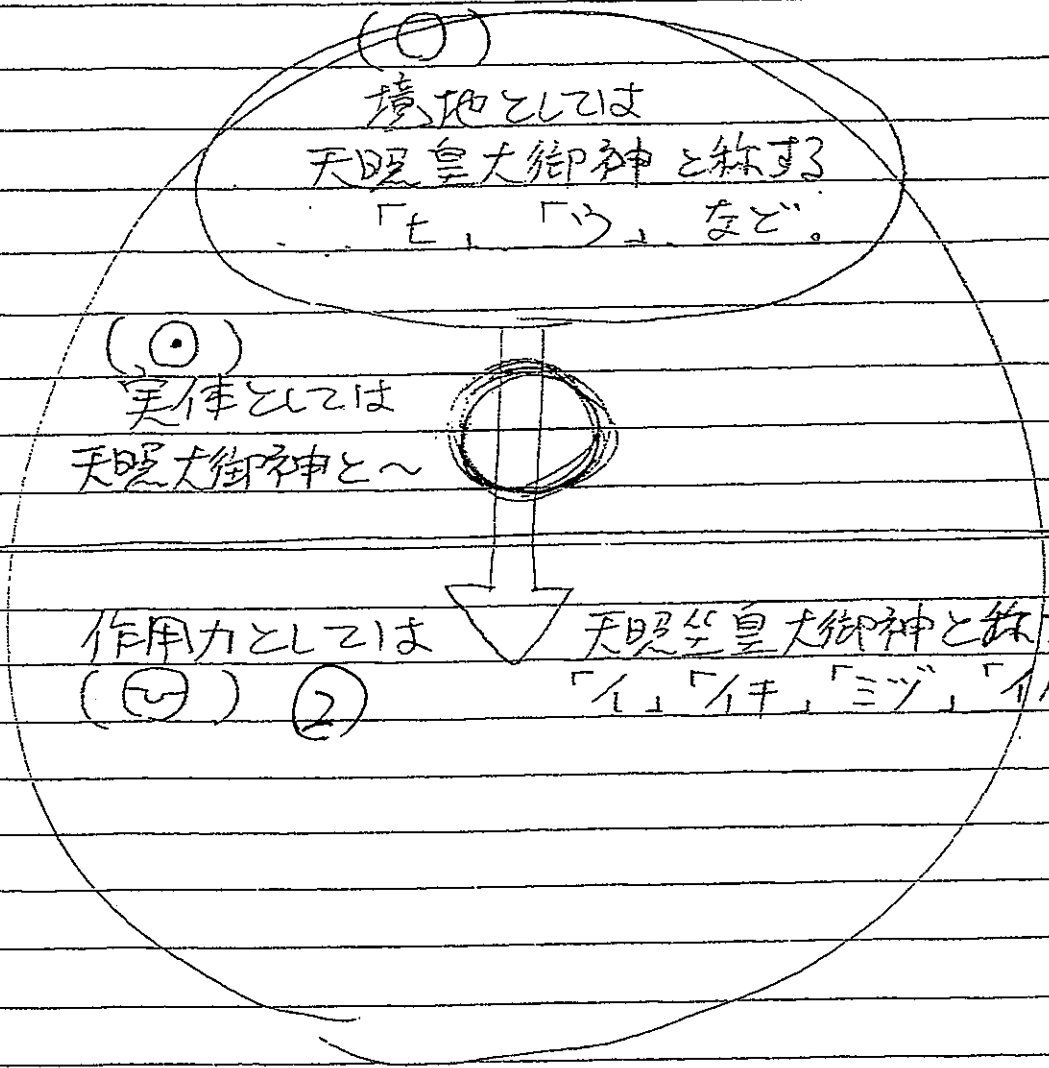
観点」があるのだ」という意味。



「イザナギノカミの神業の成リ成リた子時」

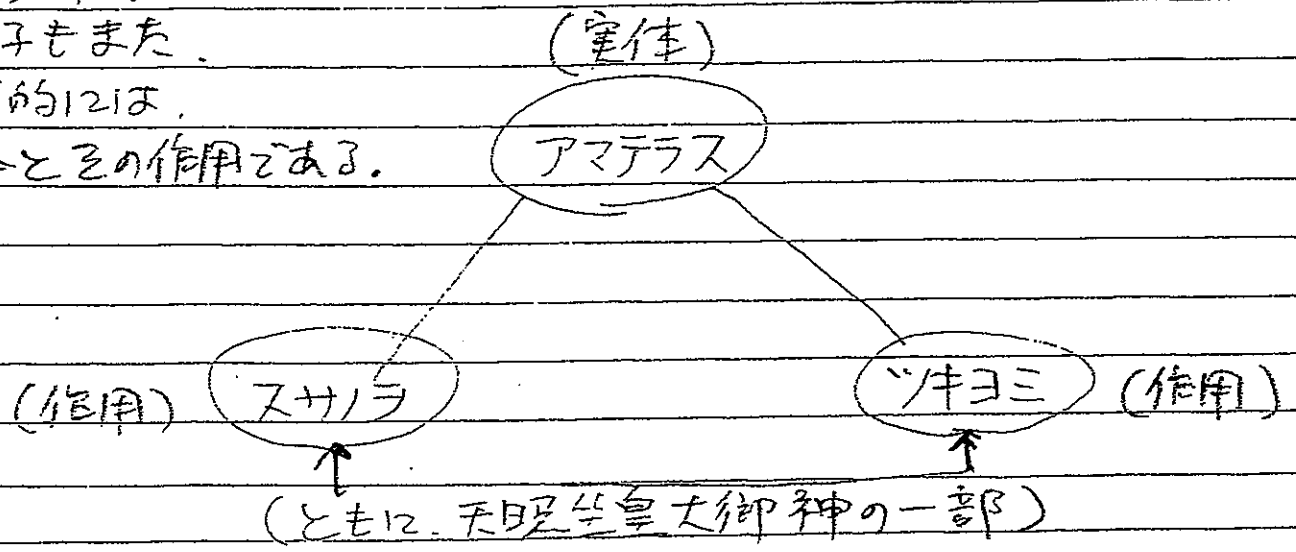
「天地は存在の尽る統一りにた子」といふ状況  
アツク アリ エゴト ミズ



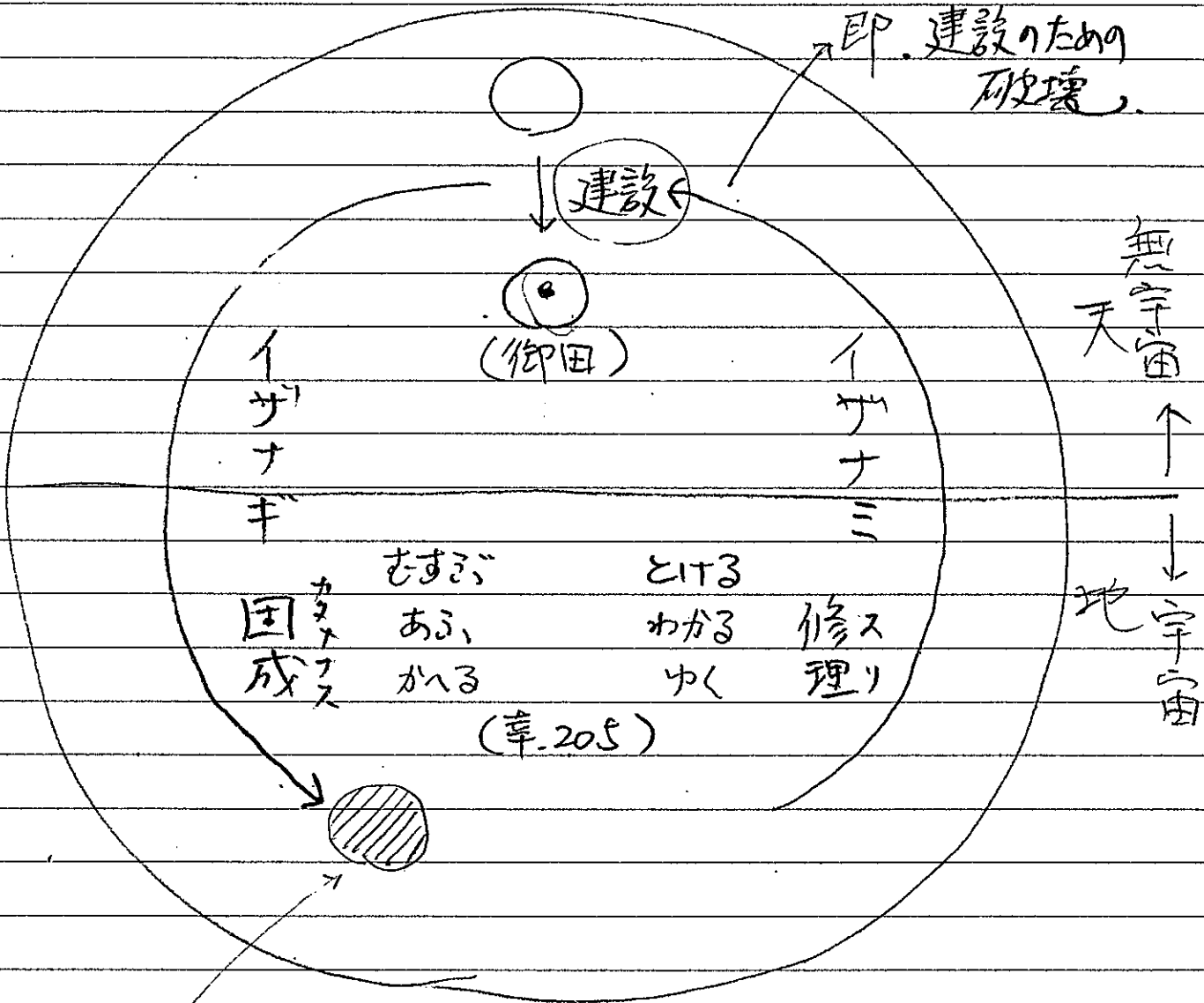


神皇

造化大神や  
三貴子もまた  
基本的には  
実体とその作用である。







イザナギノカミの神業の成り成りたりと見え

「天地は存在の尽尽 統一りにたり」といふ状況

アツク アリ エトゴト ミスル

此のやうな國を高天原ととなへて日止と呼ぶのは、完全圓成の宇宙である箇體であるとの義である。

ですから日止（ひと）と呼ぶ人は國家統治の全權であり完全圓満なる上下である。

言ひ換へると、日本天皇を日止にして、日本天皇國を日止にして高天原にして有道と云ふのである。

ひとみなは、なをことにしてわれありと、かたみにぞしるかみのうけひて。

マウシガイフノニハ、クラシニコマラヌヒトデナケレバ  
孟子曰。無恒産。而有恒心者

タタシキコトヲヌルモノデナイノガ、オホクノヒトノ、ツネテ  
。惟士爲能。若民則無恒産。因

アル、ソレダカラ、ソレヲノヒトヒトガ、アキラクニクラセル  
無恒心。苟無恒心。放辟邪侈。

ヤウニシテヤルノガ、マツリゴトノ、ダイイテニアル。  
無不爲己。及陷於罪。然後從而

ヒトヒトガ、アキラクニクラセルヤウニセズシテ、ワルモノガ  
刑之。是罔民也。

デタカラトテ、ソレヲツカマヘテ、セムルノハ、マルデ、アミ  
ツハツテ、ヒトヲトシテ、ヒトヲコロスヤウナモノデアルト

マツリゴトノホリテアル。

マツリゴトとは國家の中心から外郭に向つて油を供給することである。

其の供給された油を運用して外郭から中心に還して行くのが祭である。

それで、マツリゴトとマツリとは内と外と、上と下と、本と末と、枝葉と根幹とが相互に交流疎通する行事なので、相互に表裏をなしつつ國家を治め、天下を和ぐる妙用を現するのである。

油とは比喩である。  
猶太人が膏注ぎたるものと云へる如く、油とは神の稜威である。

それ故に又、水とも云ひ、火とも云ひ、靈とも呼び、無とも稱するので、極で、無極で、極大で、極小で、物で、純男で、罔象女で、佛で、恵保婆で、閻魔天で、必竟、空なる實在である。

其の實在は裏から観れば無宇

宙で、表から観れば箇體で、表の表から観れば大宇宙で、裏の裏から観れば點で、裏の表から観れば零で、表の裏から観れば直日で、表と裏とを合せて観れば二で、経で、○で、○で、三で、身で、一で、○で、火経身で、日止で、人で、人間世界にほかならぬのである。

火人（ひと）と日止（ひと）と人間世界との關係を簡単に説明すれば如上である。

そのそのの、こころこころにそのさまの、うつるをみればかみながらなる。

以上 昭和十四年五月十五日

山谷 識

觀門の見方

ミイヅ  
カキツ

空なる實在（神の綾威の二とで極、無極、極大極小と表現）

裏↓無宇宙

表↓圓體

表の裏↓大宇宙

裏の裏↓點

裏の表↓零令

表の裏↓直日

表と裏を合わせると↓ニ↓経↓◎↓◎↓三↓身↓一↓◎↓

火経身↓日止↓完全圓成の宇宙である圓體である

とは

ヒノカミ ヒノカミ  
○神と日神の区別

- 「<sup>ヒ</sup>零」 ----- 「サギリ」 ----- <sup>タカマノハラ</sup>高天原（無宇宙）  
① 「ヒカリ」 ----- 「カミ」 ----- <sup>ヒノカミ</sup>日神

「言霊の幸」 149～150参照

150頁5行目より

『サギリの中に生まれる神が<sup>ヒノカミ</sup>日神である』

古事記では アメノミナカヌシノカミ（造化參神）

日本書紀では クニトコタチノミコト

旧事紀では アマユヅルヒノアマノサギリ

クニユヅルヒノクニノサギリノミコト

→各々 神名は異なるがすべて「同一の实在」である。

古事記底本77頁、「天の安の河の誓約」の段より

『吹き棄<sup>う</sup>つる気吹<sup>いぶき</sup>の狭霧<sup>さぎり</sup>によって成れる神を<sup>ヒノカミ</sup>日神と云う』

（幸149頁）

（アメノミナカヌシノオホミカミ  
アマテラススメオホミカミ

↑

幸151頁8行目

『そうした気吹の狭霧を吹き成す神は<sup>ヒノカミ</sup>○神と云い、吹き成された側  
である<sup>ヒノカミ</sup>日神とは区別される』

→（アメノミナカヌシノカミ  
アマテラスオホミカミ

# 祖神と主神

多田山公遺稿

五はは

「惠保婆、我が主に宣り給はく、我れ今汝を生みたり、總べくの國をば汝に与へん。」

此の本文に依りて、惠保婆とは祖神にして、我が主たる基督を生み給ひし靈なること明なり

「神の靈水の面を蔽へり。」と云へる靈は即、此の靈なる惠保婆にして零なり。

故に極大極小にして「之れを開けば六合を蔽ひ、之れを閉づれば蜜に蔵るる」ものにして、「物在り、天地に先ちて存す」と云へる物なり。

「天地初判、一物在於虚中」と云へる物にして、虚にして、中外にあらず、有無にあらずるなり。

一にあらざる二にあらず、三四五等にあらずるなれば、零にして、〇にして、火にして、空虚なり、〇三きの教入来たりしところなり。

故に物ならざるの物なり、神ならざるの神なり、人無きの人なり、神無きの神なり、人ならざるの人なりとも云へるなり。之れを天御中主大御神（あまのみなかぬしのおほみかみ）とも天照大御神（あまてらすおほみかみ）とも天常立神（あめのとこたちのかみ）とも教へられたれども、日本古典には其の然ることを説示せず。

僅に別天神・獨化之神・獨神隱身・一神・等の名を記したるのみ。

故に之れを知らんと欲せば、唯一専念に神名を奉称して神命を仰ぎ、神界眞理の大道に立ちて體得せざるべからず。

唯一専念神名奉称  
神人來示 八神殿

神ならざる神とは〇にして零なる極大極小なれば、總べてにして、計算すること能はざる無なり。

「莫登區」と古典に載せたる區なり。

此の區は「マト」と訓みて「的」「書」「禰」「禰」等の文字言語を記すべしを得べく、「高」

區（たかまと）「的形（まとかた）」等の語と等しくして、「閻魔天（やゝま）」「摩耶（まや）」「聖母（まりや）」等と同義なり。之れを「親（おや）」とも「祖（おや）」とも「天神（あまつかみ）」とも「天祖（あめのみおや）」とも傳へたる「祖神（みおやのかみ）」なりとなす。

祖神は國を築き神をも生み給ふなれば、神の外なる神なりとは云へるなり。

「神は宇宙を造り給ふ」とも「宇宙の外なる神」とも云へるは此の祖神なれば「マト」にして「マトカタ」・「タカマト」・「サヤギナキヒ」・「アメノミオヤ」・「オヤ」・「アマツカミ」・「マリヤ」・「ヤシマ」・「マヤ」・「アメノトコタチノカミ」・「アメノミナカヌシノカミ」・「アマテラススメオホミカミ」・「エホバ」等にして、支那人が「神」と描きたるところなり。

「ミント」なり「ミチ」なり「ノチ」にして「命」・「天命」・「道」・「大道」等と書く。此の區は「尊」の一

字を以つて「ミコト」と訓ましたるなり。

従つて、此の「尊」とは神ならざるの神なり。

然れども、「命」とは異にして、○ならざるの□なり。

□なりとは「クニ」にして怪奇の存在なりとの義なり。

相（すがた）無くして相を現したりとの義なり。

○は相無く音無きを示し、□は相無く音無きものの相を示すことを教へたるなり。

ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリ。

以上

昭和十一年十月三日

○も□も共に祖神なる火なれども、○は圓にして□は方なり。

方とは「スガタ」なれば「形無きの形なり」、「法則無きの法則なり」、「無きにはあらざるなり」との義なり。

無きにはあらざるものの結び結ひたれば「ヒカリ」なりき。

「神、光あれと云ひ給ひけれ

「神、光あれと云ひ給ひけれ

り。

「日神（ひのかみ）」なり。即回なるなり。

一にして二にして三にして四にして五なる「ヒフミヨイ」にして「神代（かみよ）」にして

「神代五代（かみよいつよ）」にして「カミカカリ」なり。

「神二つの光を興へ給ふ」とあるは二回にして水（みづ）にして「天なる水と地なる水とに別ち給ふ」と云へる天地の日なり。

「天護日天狹霧國禪日国狹霧尊」と傳へたる神なり。

一神にして二神にして「ヒ」にして「ヒト」にして「カミ」にして「アメツチミスマルミタマノカミ」にして「アメツチノカミ」にして「アメツチノカミワ」にして「二柱御祖神（ふたはしらみおやのかみ）」にして、

「天御柱國御柱」にして「八尋殿（やひろどの）」にして「八神（やはしらの）」にして「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神」にてましますなり。

之れを「アマノヌホコ」とも「シホツキノホコ」とも「シホ

コヲロコヲロ」とも「美斗能麻具波比」とも教へたまへる産神にして、「高皇産靈神」にして

「神皇産靈神」にして「神魂高魂生魂足魂玉留魂大宮女御饌津神辭代主」にして「大直靈神」にてましますなれば、「ヤタノカガミ・ムラクモノカムツルギ・ヤサカニノマガタマ」にして

「オキツカガミヘツカガミヤツカノツルギイクミタマタルミタマカカリカヘルミタマタルミタマチカヘシノタマヲロチノヒレハチノヒレクサクサノモノノヒレ」なる「ニギハヤヒノミコト」にして「一二三四五六七八九百千萬」にして「八百萬魂神」にてましますなり。

以上

昭和十一年十月三日夜半

之れを二柱御祖神の神挂と称して生産の祕事なり。生産は人の最快とするところにして、人を産むを其の極となすなり。

コヲロコヲロ」とも「美斗能麻具波比」とも教へたまへる産神にして、「高皇産靈神」にして

「神皇産靈神」にして「神魂高魂生魂足魂玉留魂大宮女御饌津神辭代主」にして「大直靈神」にてましますなれば、「ヤタノカガミ・ムラクモノカムツルギ・ヤサカニノマガタマ」にして

「オキツカガミヘツカガミヤツカノツルギイクミタマタルミタマカカリカヘルミタマタルミタマチカヘシノタマヲロチノヒレハチノヒレクサクサノモノノヒレ」なる「ニギハヤヒノミコト」にして「一二三四五六七八九百千萬」にして「八百萬魂神」にてましますなり。

以上

昭和十一年十月三日夜半

之れを二柱御祖神の神挂と称して生産の祕事なり。生産は人の最快とするところにして、人を産むを其の極となすなり。

二柱みおやのかみのたてをま

こつほのかつほのかつほのかつ

こかみこつほのかつほのかつほ

こかみこつほのかつほのかつほ

こかみこつほのかつほのかつほ

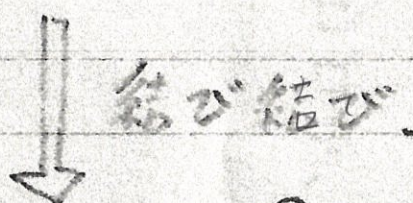
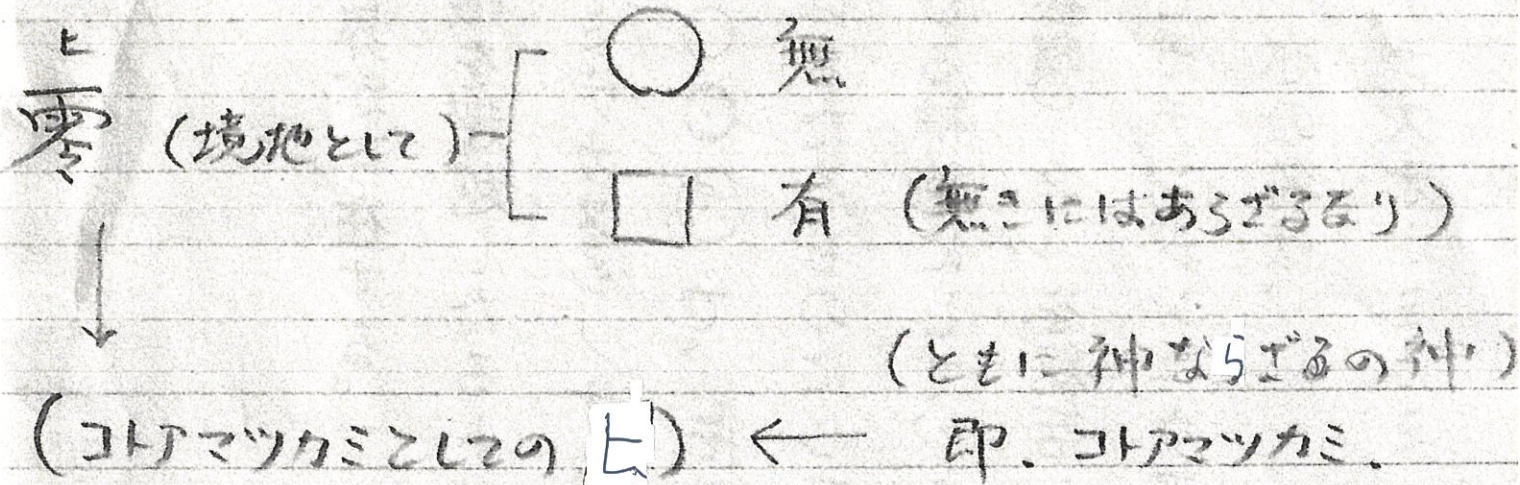
こかみこつほのかつほのかつほ

こかみこつほのかつほのかつほ

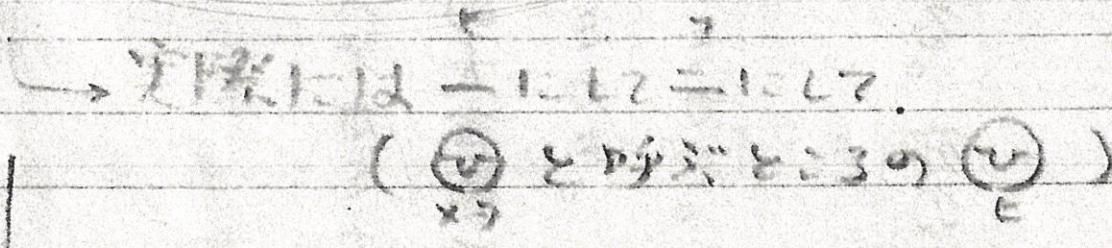
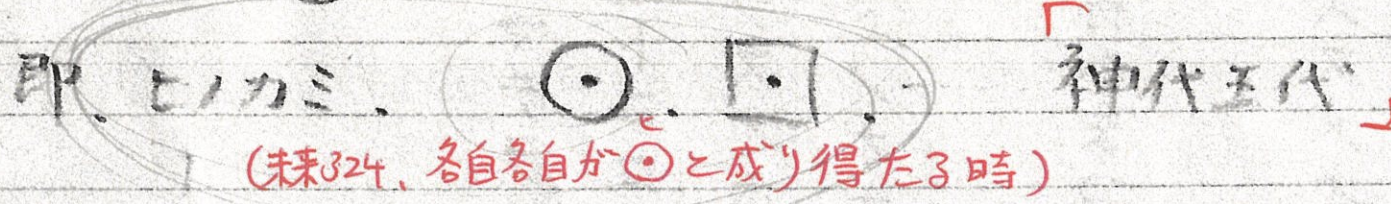
こかみこつほのかつほのかつほ



# 祖神と主神 2頁目の説明



ヒカリ (アマの段階. アマツカミ)



これを説明した用語が ⑪. ⑫.

- 解 (神代七代... コトアマツカミの領域まで流れた. 作用力の表現, ○)
- 親 (神代五代... アマツカミの領域における. 実体としての表現, ◎)



ことを明らめ得たる時、各自各自分分個個としての入天万類がそのまま、ミタマ身魂であり魂タマであり零である事実を顕影して一円光明の○と成る。人ヒトの身ミなり神カミと成り得る時、カミ「カミ」たる示シである。

各自各自が○と成り得たる時、緯ヌキとしては神界カミで経タテとしては神代カミで経緯タテヌキを合せては十カミで、共に「一」である。之を「日」であり「日神」であり「人」であると云ふ。その「人」とは、「日止」であり「火人」であることを教へて⊕と描き田とも◇とも品とも品とも日とも串とも申とも伝へて、カミ「カミ」たる示である。そうして又、既清☵と画するのは伏羲の所伝を敷衍したので「湯」であり「ユ」である。それを日本の古典には「中津瀬」と伝へて純真無垢の一点で中心であることを知らしめてある。之を「否なり」と呼ぶ。「そのやうなもの有るのではな

い」との義である。  
珍重珍重。如是の「否」。如如起滅。怪奇至極。故に呼んで「神」となす。之は支那人の「无方」と云ひ「陰陽不測」と称するところの「神」である。

世界の学者中には此のやうな「神」は日本人云ふ所の「カミ」とはまるで別だと云ふものが多い。さうして、  
古典所伝の「零神」を忘れようとする。

未采324頁より

緯対 — 神界<sup>カミヨ</sup> (空間) } 神代  
経行 — 神代<sup>カミヨ</sup> (時間)

この「界」と「代」は当て字。

大切なのは、「カミヨ」というコトワズ。(無宇宙)

「<sup>カミヨ</sup>神代<sup>カミ</sup>の神」は、「<sup>ヒノカミ</sup>無宇宙の零の神」の意味。

同頁、3行目。

意訳 (人間が無宇宙のヒノカミと同じ  
境地に立った。その時には、

「各自各自が<sup>ヒ</sup>◎と成り立ち時。へ」

以下は、その境地を表現した文。

叙稿「祖神と主神」に即して言えば、

<sup>ヒノカミ</sup>◎としての、神代五代の境地である。

→ 途中は文学的表現で、

実際の述語は、末尾の「<sup>カミ</sup>十で、(共に)一<sup>ヒ</sup>である」である。

(2020.10.20.追記)

火である。陰であつて、陽であつて、陰陽不測である。「陰陽不測謂之神」と、支那人の傳承した「神」とは、此の義である。此の神とは、水と云ふに等しいのである。その水と云ふ字は、氷である。之は、四象で、兩儀で、太極であるとの指事で、その四象とは、☱で、☲で、☵で、☴で、象形の邊から變化したので、☱として、明瞭に四象を指示したので、☱と描くに等しいので、☱とも、☲とも等しく、之を兩分したのは、☱であつて、氷であつて、亦、申であつて、申でもある。申は神で、その示は申を説明したので、申は、それと反對に貫きて合せたる四象なる兩儀であるとの意である。四象を合せても兩儀なると共に、分割しても兩儀で、其の經の一線は、等しく太極を示し、又、小極をも指したのである。この場合、一極の火で、一極の水

それで、火を陽だとすれば、水は陰で、水火相合して、新なる箇體が築かれるので、分てば陰陽で、水火であるが、合すれば神である。變化して測りがたきが故に鬼である。魔であると呼ぶので、神魔である。妖怪變化である。水火は既濟で、火水は未濟で、天地は否で、地天は泰で、風地は觀で、地風は升で、神魔本來神魔にあらざるの義である。この場合、火と水と二極を意味する。

然れども、水は自、水にして、火は自、火である。その水を陰とし、母胎として、火を仰ぎ、陽を受くる時、萬類萬物は、繁殖化育するのである。之を、零が火を孕むと呼ぶ。神魔出没水火起伏の現象世界を脱却して、神人佛子生誕するの祕儀密言である。「天真井水」とも、「水神罔象女」とも稱へまつるので、祓禊が佛誕であり、神人産出であることを知らるるのである。

天真名井水とか、豊水とか云ふ「ミモヒ」は、火の結ばれた身との義で、一の産靈たる三である。日の産靈たる實である、零の結びたる實である、靈の結びたる身魂であるとの意なので、「ミ」とは、身で、實で、稔で、

充塞で、「モ」は、思で、思慕で、戀愛で、惚ぶで、兩者相合するので、股であり、裳裾であり、喪である。「ヒ」は、火で、靈で、零で、一で、〇で、魂である。故に、「ミモヒ」とは、稜威で、天地の神輪で、支那人は、水火既濟と教へたので、水であり火であり、火であり水である。陰で陽で、陽で陰で、陰陽不測であると云つたので、圖にて示せば、☵☲で、之は即、神であるとの義である。其の神を、「ミヅハノメ」と稱するので、日本紀には、水神罔象女と書いてある。罔は無であるから、象無きの女なので、純男の語に對すれば、純女と云ふに等しいので、女のかぎりである。之を☵☲と畫くので、坤道耦生で、陰陽俱生で、女ならざるの女で、處女ではないので、胎である。一切の物を産出する母胎なる女なりとの義で、美田で、淨地で、皇土で、天國で、樂園で、磐境で、高天原なのである。

水と火と云へば、まるで別なやうに感じ易いが、現今の人の考と、古典の傳へとは、甚しく異つて居る。ユダヤの教典には、「元始に、神は、天地を創造りたまへり。その時、地は、定まれる形無く、曠空しくして、暗黒の水なりき。水ならず地ならざるの地は、神の火にして、神の靈にして、空零の〇なりき」「神の言ひたまひけるは、水の中に蒼穹ありて、水と水とを分つべし。神蒼穹を造りて、蒼穹の下の水と、蒼穹の上の水とを判ちたまへり。即、斯くなりぬ」

之で、天の水と、地の水と、天と地との判別とを教へられたので、天真名井水とは、天上の水で、豊水とは、地上の水で、水神罔象女とは、神の靈であることが知らるるのである。

ギリシヤでは、哲學の開祖と云はれて居るターレスが、水は、萬物の原質で、他の一切の物體は、悉、水の變形であると唱道したのであるが、不幸にして、神の靈である水と言ふことを明瞭にして居らぬ。爲に、後學の迷

ひを惹起す虞が多いのである。

支那人は、亦別に、坎と稱して、破壊の水を説いて居る。此の水は、龍蛇で、陰極で、暗愚で、黑蛇で、溺没で、二陰が一陽を姦するもので、人間世界の終末は、此の如くなりと訓誡したものである。

之と全全反對の水を教へたのは、印度人で、辯才天は、水の徳を以つて、智慧財寶等の一切を人天に施與し、吉祥天は、樂園を築きて、佛子を化育するに、八功德の水を以つてし、水天は、摩尼を以つて、萬類を六道の中より救出し、阿彌陀の淨土は、水精宮にして、八功德の水を湛へたりと記して居る。皆共に、水ならざるの水で、火ならざるの火で、「ミモヒ」で、釋迦再生の祕言で、西方淨土を此の世に築くべき祕儀密言であるから、「祕禊」の神傳であることを窺ひ知らるるのである。

氷が四象で、兩儀で、太極で、無極で、無で、零で、靈で、六で、六身魂であることは、一で、二で、三で、火經身で、〇で、∞で、☉で、☺で、火を以つて築き成したる神身で、空零を緊繫緊縛したので、空の實で、空不空で、☐で、晃であるところの神火であるからである。

其の氷は、神の祕禊であり、また其の結果であることは、伊邪那美神の祕と、伊邪那岐神の禊と、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神の禊祕との教ふところである。

古典は傳へて、「天孫降臨」「神子再臨」「佛陀再生」と云ふ。が、實に之は、祕中の祕で、神と神とのみ、佛と佛とのみ、密授護持するところである。固より、筆舌にすることを許されぬのであるが、現今の學徒は、古典を讀むに、人間的私見を先として、神傳を得ることを知らず、佛語を聞くことを會せず、小智に拘泥し、我意に緊縛せられ、瓦礫と瓊玉とを剖判する大智を忘れて居るから、徒に喧喧囂囂として、人を惑はし、世を毒するの

(全8頁)

## 言霊の幸 14頁の解説、序文

まず、「陰陽不測謂之神」という一文の出典は、易經の繫辭伝である。

但し、易經での正しい語順は「〜之謂神」であり、言霊の幸における表記が単なる誤植なのか、意図的な改変なのかは判然としない。

いずれにせよ、これは「陰陽<sup>はか</sup>測<sup>これ</sup>ら<sup>ん</sup>べ<sup>い</sup>ざる。之を神と謂ふ」とよ訓み、ここで言う「神」は「太極」や「道」や「その働き」を意味する用語である。

即ち、『(この世のモノはすべて陰と陽とから成り立っているけれども) この世なるぬところには、陰とも陽ともつかぬモノが実在している。ここでは、これを「神」と呼ぶことにする』というのが、この一文の大意である。

また、易では『太極が二つに分かれて兩儀（陽、陰）と成り、その兩儀がまた各々二つに分かれて四象（老陽、少陰、少陽、老陰）と成り、その四象がまたさらに各々二つに分かれて八卦（乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤）と成る』と考へる。

こうした名前からも解るとおり、太極から四象までは、全く抽象的で理念的な存在であり、八卦に至って初めて、天（乾）や地（坤）などといった、具象的で現実的な存在となる。

一方、神道の数理においても「四」<sup>ヨ</sup>までは素材を表わし、「五」<sup>イ</sup>に至って初めて箇体を表現する数となる。

よって、多田雄三は両者の間に「四」という共通項を見出し、明治の知識人にとっては基礎教養の一つであった易経の用語を、以下に「説明の便宜として」利用しているのである。



以下、漢字の<sup>カタチ</sup>象形に関する解釈は、全て多田雄三個人の「靈的な直観に基づく独創的解釈」であって、漢字の「歴史的な(現実の)成り立ち」や「本来の意味」とはほとんど関係がない。

あくまでも「明治の知識人」に対して書かれた「説明の便宜」でしかない、という点に、我々はよくよく留意して読まねばならない。

## 言霊の幸 14頁の解説 本文

## ① 2行目から7行目の解説

「氷」という字は、「氷」という<sup>カタチ</sup>象形をそのまま文字にしたものであり、この<sup>カタチ</sup>象形は、四象と兩儀と太極とを同時に表現している。

即ち、「凵」という四本の短い線がそのまま四象を表現し、それを縦の二線によって左右に「兩分」していること自体が兩儀を表現し、その縦の二線がそのまま太極を表現しているのである。

また、四象は「火」とも「人」とも描くことができるが、これは「火」の象形たる「𠄎」から変化したものである。

故に、「火」も「氷」と同じく、四象や兩儀や太極を表現する「比喩」となる。

(ここで言う「四象と兩儀と太極」とは、詰まるところ、

「簡体成立以前の、無宇宙の側の実在」の総称である。)

また、「品」や「田」や「」も、「」と全く同様に、明瞭に四象を表現した象形<sup>カクチ</sup>であり、それ故に、「品」や「申」や「串」もまた、「」と同じく四象と兩儀と太極を同時に表現した象形<sup>カクチ</sup>であると言える。

なお余談ながら、「神」という字は、上記の「申」に、『この字が「祭事に関する事柄」を意味する字であること』を表示する部首<sup>しめずん</sup>（示）を付加して作られた字である。

「申」は元々、「陰陽不測の神<sup>しん</sup>」を意味する字であったが、後に、動詞<sup>エ3</sup>の「申す」の意味で使われることの方が遙かに多くなってしまったので、「本来の意味で使っている」と説明するために、わざわざ部首を加えたのである。

## ② 8行目から11行目の解説

両儀や四象それぞれ自体はまだ「箇体」ではなく、それらが組み合わさって初めて「新たな箇体」が築かれる。

そして、その「箇体」には、それぞれに「善し<sup>よ</sup>悪し<sup>あ</sup>の区別」があるが、両儀や四象にはまだこうした区別は無い。ただ、それぞれがそれなりの「意味や性質」を持っているだけである。

これは、例えば、『八卦の「天(乾)」や「地(坤)」といった個々の卦にはそれぞれの「意味や性質」があるだけで、そこにはまだ「善し悪しの差」は無いのだが、八卦を二つ上下に組み合わせ、六十四卦にすることで、初めて「泰」や「否」といった「善し悪しの判断」ができるようになる』というのと同じである。(これ故にこそ、多田雄三はこれらの卦をしばしば「比喩」として用いるのである。)

両儀や四象が組み合わさって来た「<sup>カミ</sup>筒体」のありようは、  
 実にさまざまであり、時には「<sup>カミ</sup>神」となり、時には「<sup>マガツビ</sup>魔」ともなる。

しかしながら、「<sup>カミ</sup>神」も「<sup>マガツビ</sup>魔」も元々正せば、同じ「素材」から  
 出来ており、ただこの「素材」同士の組み合わせ方が異なっている  
 だけなのである。

素材（両儀や四象）このものには、神魔の区別は無い。

即ち、<sup>カミ</sup>神も<sup>マガツビ</sup>魔も本来的に<sup>カミ</sup>神や<sup>マガツビ</sup>魔だという訳ではない。

（互いに、全く根本的に別々の存在だという訳ではない。）

決して「善悪二元論」のような考え方をしてはならないのである。

（<sup>マガツビ</sup>「魔」との対比で言う<sup>カミ</sup>「神」（筒体）と、「陰陽不測」の  
<sup>カミ</sup>「神」（素材）とは、全くの別物であることに注意！

なお、「神魔同凡」とは、「一元論である」という意味。）

<sup>カミ</sup>神と<sup>マガツビ</sup>魔は二元論ではなく、

### ③、12行目から15行目の解説


確かに、素材同士の間には「善悪の差」は無いのだが、  
それでも「性質の違い」は存在している。

例えば、水(陰)には水としての性質が、火(陽)には火として  
の性質があるので、これらの素材を組み合わせる「正しい筒体」を  
産出するためには、それぞれの性質を考慮して、それに合った  
「組み合わせ方」をしなければならぬ。

即ち、<sup>ミヅ</sup>「水と母胎として火を受けるとか、<sup>ヒ</sup><sup>ヒ</sup><sup>ヒ</sup>「雲が火を孕む」  
などと表現されるような「組み合わせ方」がこれであり、

そのようにして初めて、万類万物は繁殖化育するのである。

これは、易経で言う「地天泰」の組み合わせ方であり、

また、神象としては「<sup>ユ</sup>

<sup>ミツキ</sup>「<sup>ミツキ</sup>稜稜もまた当然に、この組み合わせ方に則ったものであり、

それ故に、神人産出のための正しい手段となるのである。

2020.4.7. 「ヒ」と「ミヅ」の続き

また、幸15頁の14～15行目には 『<sup>アマノマナヰノミヰヒ</sup>天真名井水<sup>ミヅ</sup>とは天上の水で、  
<sup>トヨノミヰヒ</sup>豊水<sup>ミヅ</sup>とは地上の水で』 とある。

即ち、人間は、<sup>アマノマナヰノミヰヒ</sup>天真名井の水を汲み、また<sup>ミセン</sup>(素饌として)

<sup>トヨノミヰヒ</sup>豊水を<sup>たまわ</sup>奉ることによって、象徴的にこの「<sup>ミヅ</sup>無宇宙と宇宙との  
 間を循環する、巨大なミヰヅの流れ」の中に、<sup>みづから</sup>自身を置く  
 ことができるのである。

(実際には、万類万物は最初から、こうした「<sup>うは</sup>流れ」の内に  
<sup>あ</sup>在るのだが、それを深く自覚し、主体的にこの「流れ」の中に  
 参入するためには、こうした儀式的所作が必要となるので  
 ある。また、<sup>ミセン</sup>素饌そのものは象徴なので、当然に縁とおりの  
 意味が込められている。これを矛盾と考える必要は無い。)

この「<sup>おあ</sup>流れ」をごく大まかに図示したのが、7頁の図表で  
 ある。

この「流れ」は、実際には、あくまでも「途切れることのない、  
<sup>ひとがたまり</sup>一塊<sup>はたらし</sup>の作用力」なのだが、人間の目には、「下降の局面」  
(天のミヅ、▽ウダルモ、カムロギ)と「上昇の局面」(地のミヅ、  
△ノボルモ、カムロミ)とに分かれているかのように見える。

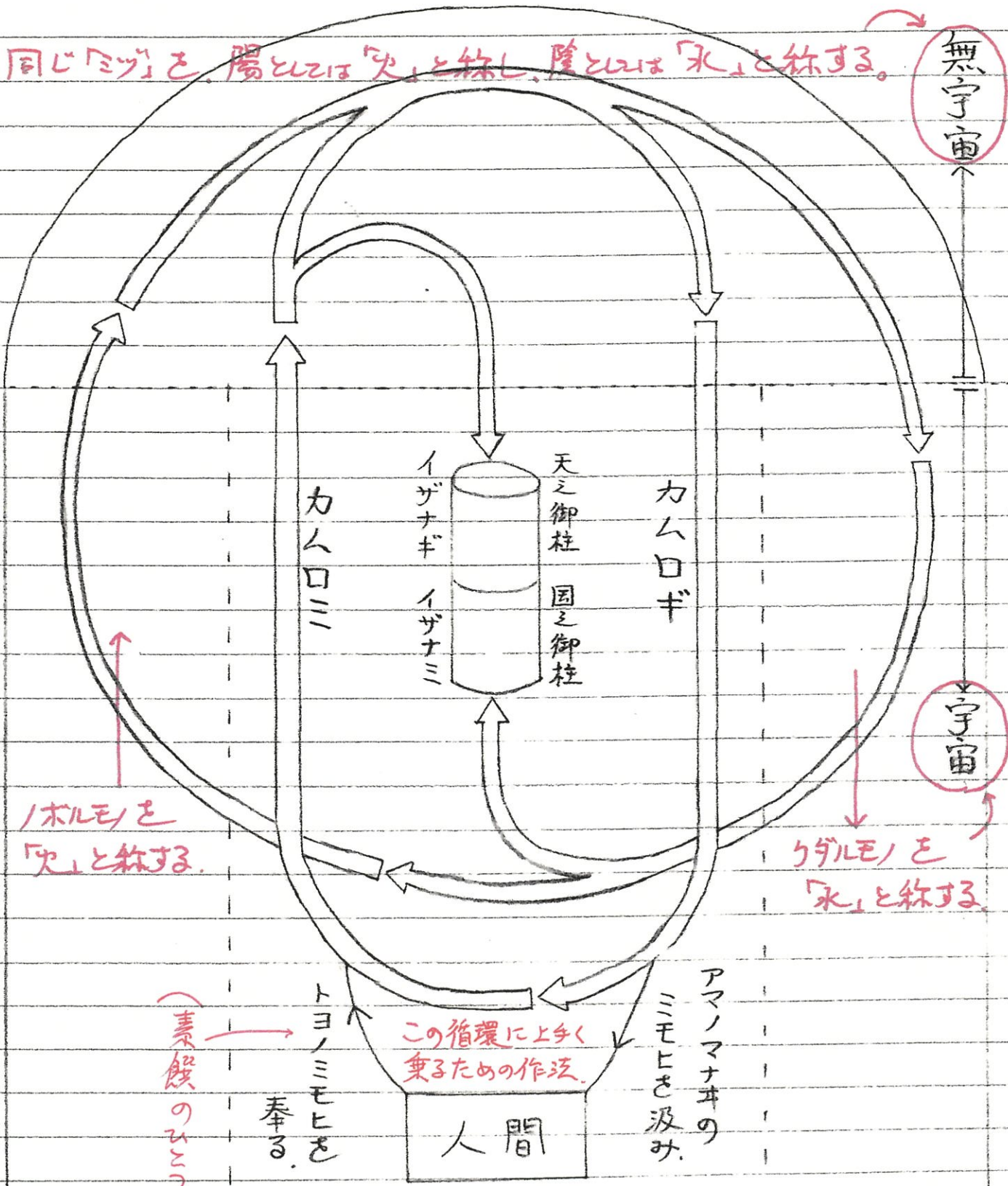
また、7頁の図表では、人間が直接に参入することのできる  
「ナカツクニの側での循環」と、生きている人間には無縁の  
「ヨモツクニの側での循環」とを、分けて表記したが、  
これもまた、単なる<sup>べんぎ</sup>「理解のための便宜」に過ぎない。

実際には、もっと複雑に<sup>がら</sup>絡み合って、「どこかで切り分ける」  
といふことの全くできない<sup>ひとがたまり</sup>「一塊」の流れになっている  
ものと思われる。



# ミイツ 循環図

同じ「ミツ」を、陽と云は「火」と称し、陰と云は「水」と称する。



「ホルモ」を「火」と称する。

「ガルモ」を「水」と称する。

（素戔のひまら）

この循環に上手く  
乗りための作法。

人間

アノマナキの  
ミモヒを汲み。

（ヨモツクニ）

（ナカツクニ）

（ヨモツクニ）

2020.1.21.(火)

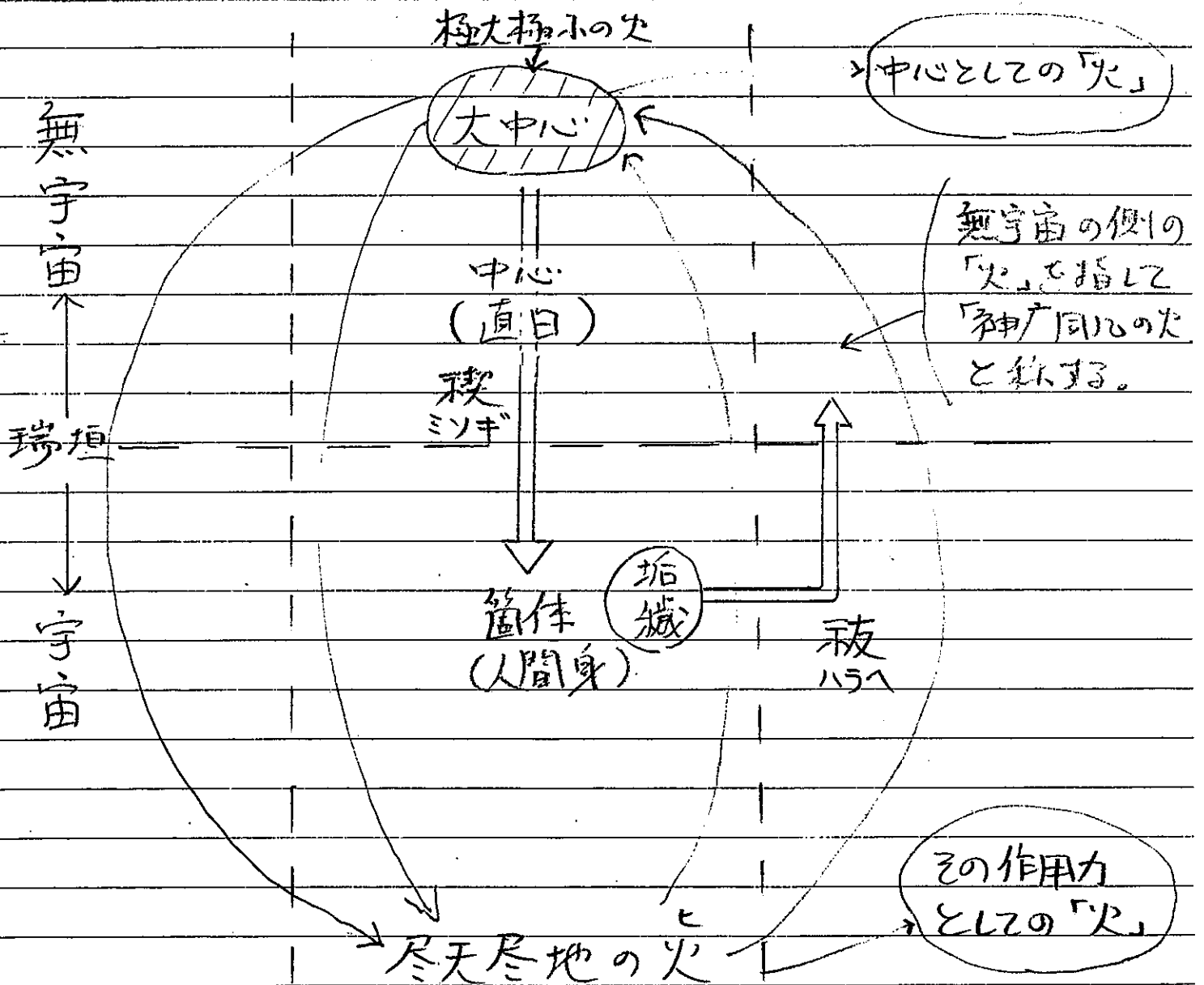
① 大宇宙の大中心 極大極小の火 零

ムスビ 産霊

②

ムスビ 産魂

③ 宇宙(筒体)の中心 (最大最小のー 根本魂としての魂)



ヨモツクニ ← ナカツクニ → ヨモツクニ

尽天尽地の火、とは、

「火」は現代語では「熱エネルギー」のイメージ。

必ずしも「炎」のように考える必要は無い。

「熱エネルギー」は光(赤外線など)のように、

すべての物体が独立して存在することまでできるが、

その一方で、すべての物体の中には、必ず一定の「熱量」が

内在している。

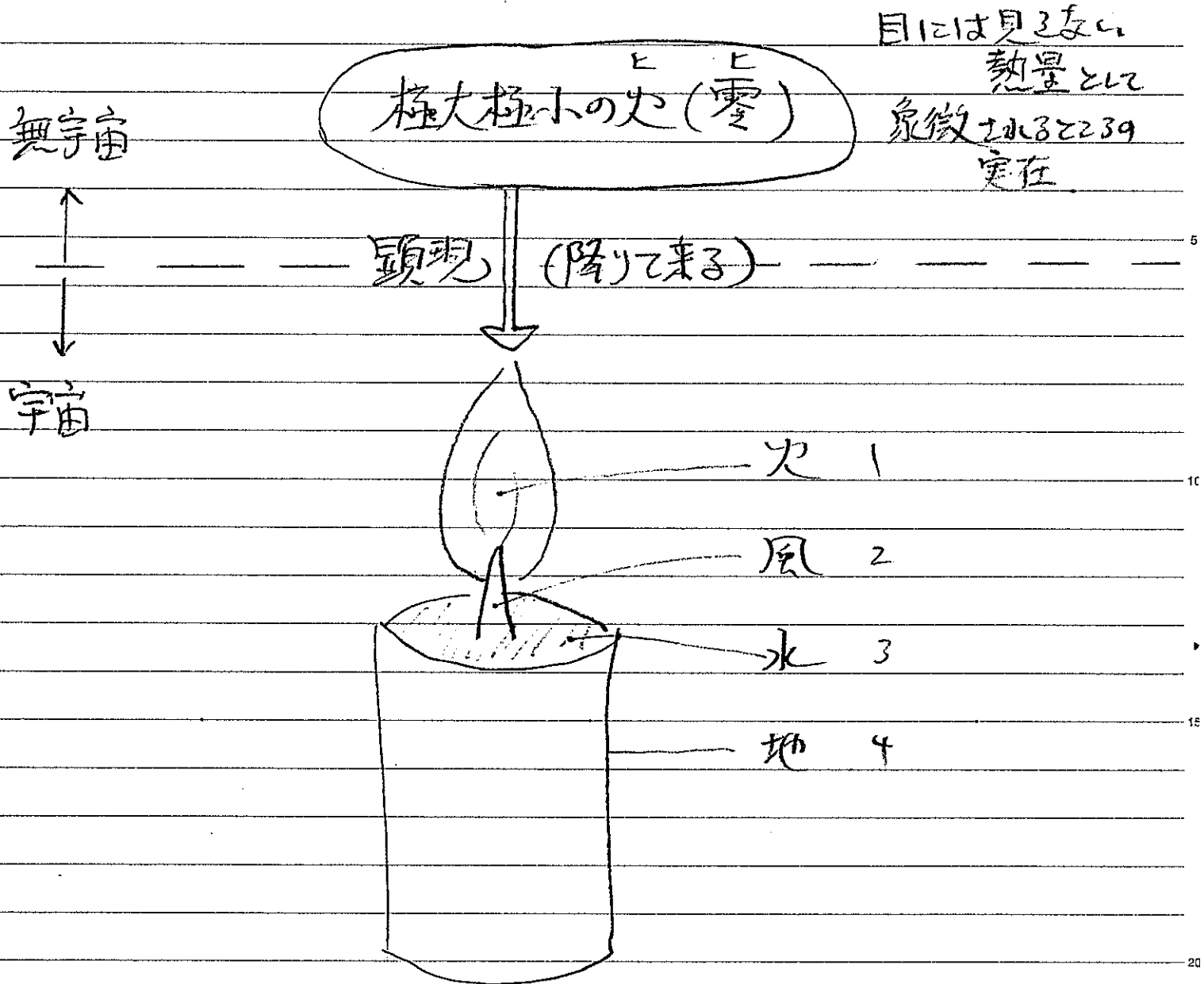
(現実には「完全に、絶対温度零度の物質」というものは存在しない。)

即ち、熱は、個体の内にも外にも遍在している。

よって、古典語ではこの「熱」を「火」と象徴した上で、

「尽天尽地の火」などと称するのである。

# 無宇宙の火と宇宙の火



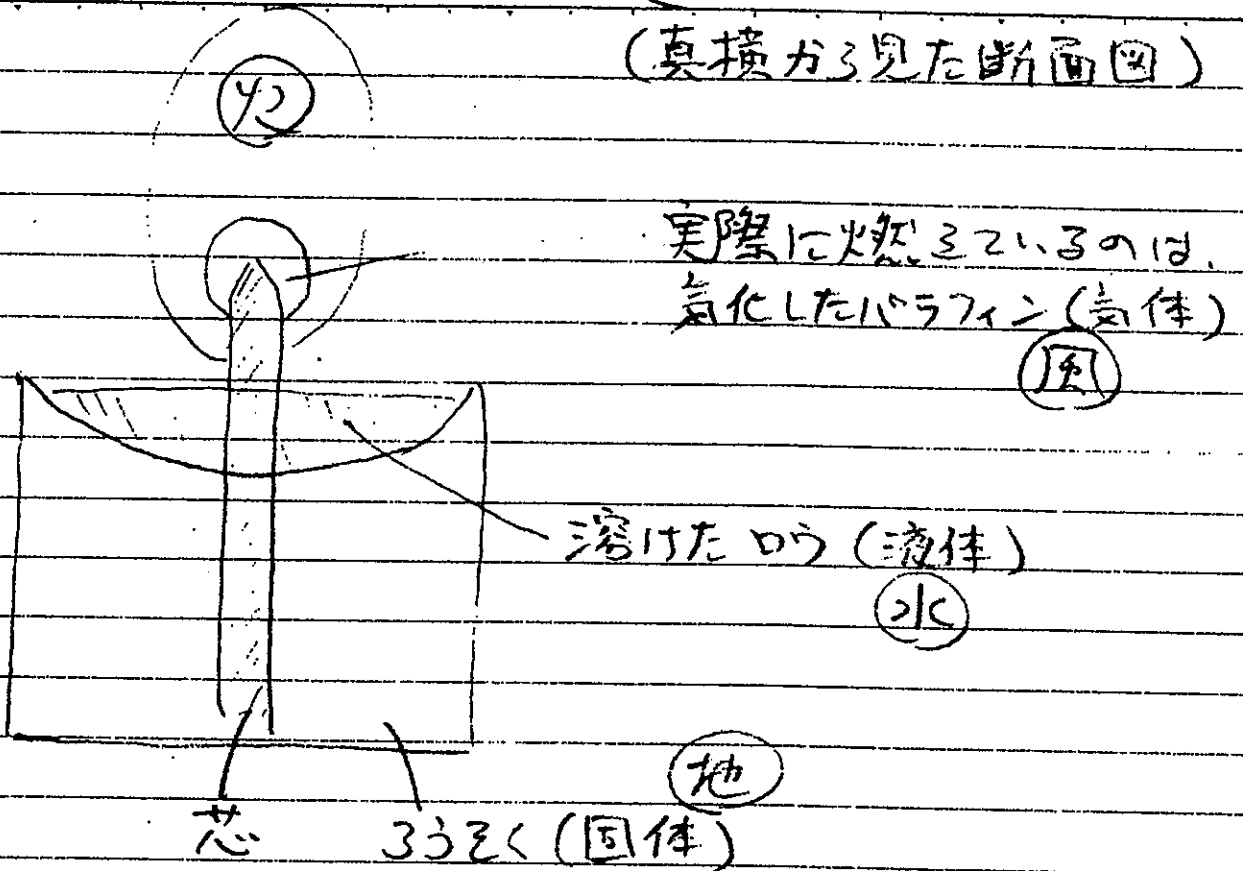
（ 3つ2くの炎は、宇宙（第一階層）の火の象徴であり、

宇宙の火は、無宇宙の火が顕現したものである。

→ 3つ2くの炎を見ただけで、ここまで連想できるように  
 なるべきである。

# 333の四大象徴

(真横から見た断面図)



2019.5.21.

万有の根本資料たる「零」について述べる。

「本質的に、人間にとっては「無」とでも呼ぶ、以外には  
どうしようもない何か」である。

即ち「人間の認識能力では全く認識することのできない、  
何か」である。

これを略して、「無」である、と言っている。

だが、それは決して「本当に何も存在しない」と言っている  
のではなく、「無と呼ぶ以外にはどうしようもない何か」が  
「有る」のである。

多田流としては、これを「極」と呼ぶ。

即ち、「零」とは「(小の)極」であり

これを、「解りやすい表現」として「無」とか「大」などと書く。

修理因成の修理（破壊・分解）の作用を、たと

「火で燃やす、焚尽す」と表現している。

「分解の作用」それ自体のことも、

「分解し尽くした後に残る零（分解の極）」のことも

まとめて「火」と表現している。

この「火」（分解の作用）は、特定の領域にとど

ではなく、ありとあらゆるものに適用される作用なので、

「地獄の火で、餓鬼道の火で、畜生の火で、修羅道の火で、

三千大千世界 焚尽の火である」と述べている。



⑦ アマテラシマシマススメオホミカミも、<sup>文字どおり</sup>また「オホミカミ」であり、本質的には、イザナギノオホミカミに等しい。  
だが、同じ「作用力」としての全体神でも、  
アマテラシマシマススメオホミカミ と言うと、「特に焦点の  
のない全体としての作用力」というニアズになって  
しまうので、「修理国成の作用」に焦点を当てた際には  
イザナギノオホミカミと称する。

また人間の立場からこれを仰いでば  
イザナギイザナミフツルシラミヤノカミとも言う。

⑧ ちなみに、「尽天尽地の火としてのイザナギノミコト」と  
言う時のイザナギノミコトは「全体神」としてのイザナギノ  
オホミカミのことであって、  
「イザナギノミコト・イザナミノミコト」と言う時のイザナギノ  
ミコトとは、意味範囲が異なるので注意を要する。

(合巻316頁では形容詞句が省略されている)